

第3回「第6次ニセコ町総合計画策定審議会」議事録

日時	2023年10月2日(月) 14:00~16:00
場所	ニセコ町役場多目的ホール
参加者	委員：新井 和宏、工藤 三智子、新谷 典子、瀬戸口 剛、中江 綾、 西澤 純、芳賀 修一、長谷川 博史、松田 裕子、村上 敦 (Zoom 参加) 事務局：山本 契太 副町長 黒瀧 敏雄 企画環境課 課長 阿南 孝宏 企画環境課 参事 佐々木 潤 企画環境課 経営企画係長 大野 百恵 企画環境課 経営企画係主査 吉田 智也 企画環境課 経営企画係主事 切通 堅太郎 一般社団法人北海道総合研究調査会 調査部長 野邊 和沙 一般社団法人北海道総合研究調査会 調査部 研究員 灰野 さつき 一般社団法人北海道総合研究調査会 調査部 研究補助員 ※ほか傍聴3名

1 開会

2 副町長挨拶

【山本副町長】

これまで委員や住民の方からいろいろな意見が出てきてありがたく思っている。資料1で様々な意見がある中、抑えなければならないことは万遍なく出てきている。

今日はプラスα、総合計画で掲げる冠の部分を議論していただく予定である。直近の第5次は「環境創造都市」、第4次は「小さな世界都市」とした。やれるところ・やれないところはあるが、冠に掲げたことはチャレンジしてきた。第6次ではニセコ町民がどのような冠を掲げるかが大事なところになる。今日は決め打ちにはならないと思うが、おぼろげながら冠がみえてくるところまでできればと考えている。本日はいろいろな忌憚のないご意見をいただきたい。

3 事務局からの説明

【会長】

毎回活発で有意義なご意見をいただきありがとうございます。審議会は本日が3回目で、全体として5回を予定している。次回は皆様のご意見をいただきながら総合計画のタイトルを決めていきたいが、今日はその頭出しをしたい。その前に基本的な考え方として今まで議論した内容を振り返り、大きな方針を確認してから全体のタイトルの頭出しをしたい。今回の議論は大きく2つ、全体のタイトルの頭出しをすることと、基本的な理念、考え方について意見交換をしたい。

①第1回・第2回審議会+住民・子どもWS論点とキーワード整理(案)

※事務局より説明 資料1

②2035年 ニセコ町の目指す姿(案)

※事務局より説明 資料2

③住民ワークショップの重要キーワード(案)

※事務局より説明 資料3

④重要キーワードと基本目標の関係（案）

※事務局より説明 資料4

⑤基本理念の構成要素とキーワードの関係性（案）

※事務局より説明 資料5

⑥ニセコ町の歴代総合計画について

※事務局より説明 資料6

⑦欠席委員からの意見（別紙資料）

※事務局より説明（部分的に意見を読み上げ）

今回5つの目標の姿に提案されていることは素晴らしいと思う。

増収策の早期実施について、観光のあり方からの代表としては、宿泊税の早期実施により解決が期待できる町の課題は多く、全力で実行する気概を示していくべきと強く望んでいる。利益をきちんとシェアできる信頼感があれば導入できる。

誰に向かったの策定なのか、「シビックプライド」の概念と「私」と「皆さんで」の関係を表してほしい。好きという思いだけではなく、地域に貢献していきたいという積極的な心意気がシビックプライドには含まれる。「みんなで」は呼びかけとして、掲げ方として弱く感じる。

世界を視野にした「人づくり」＝継続可能な町について、義務教育はもちろん、あらゆる場面で人を大切に育てる、思いやる、励ましあう、鍛えあう、称え合うといったまちが未来を生き抜くチカラになると思う。世界を意識することが将来、世界が意識する町になることにつながる。

「人づくり」は資格や経験ばかりではなく「考え方」を指すと思う。これらの意見は欲を言えばとの意見であり、むしろ実行・成果のあげ方を気にしている。

⑧欠席委員からの意見（電話）

※事務局より説明

- 1) 世界一住みやすい町にするために子どもの教育を最優先事項としてほしい。
- 2) 自然環境を守ることは土台となるので、ルールを作り保護してほしい。
- 3) 綺羅乃湯の料金を町民・観光客で価格差をつけてほしい。ニセコ町は観光客が多いため、観光客の方に高い値段を設定し、そこで得たお金を教育や自然保護などの費用にしてほしい。

【会長】

今日の資料の説明の中でご質問・ご意見はあったか。

【委員】

（意見なし）

4 議事

①基本目標案について

【会長】

資料4の人の絵がいい。5つの基本目標がわかりやすく表現されている。持続可能なまちをつくるのは頭をイメージし、全体を包括するような内容になっている。

まず、資料4について意見をいただきたい。5つの基本目標は、委員がそれぞれ活躍されている分野に関係すると思う。自分の関係しているものでもその他でもいいので、基本目標について意見をいただきたい。

【委員】

まちづくり基本条例の策定に関わった者としては、住民を基本としたい。国もそうだが人がいて初めて国が成立する。住民がニセコ町を作り上げていく基本理念を基に、これからも本当にいいまちにしたいということが基本構想になる。しかし基本条例が出来上がったあと、役場職員からも住民からも一時期忘れ去られた。まちづくり基本条例は元々育てる条例として作られており、もっとまちをよりよくする意味で作り上げていきたい。

環境問題に関わってきた身としては、温暖化が叫ばれていた時に活動していたが、実際よりも早く温暖化の現象が起きていると感じる。ニセコが温暖化に備えていくのか、住民を守るのか。誰もがニセコに住みたくなるようなまちづくりをしたい。

【会長】

5つの基本目標のほかにどのようなものが必要かも含めてご意見をいただきたい。新井委員は経済界で活躍されており、ニセコが循環型の経済を創る、スタートアップするのもやりやすいという話だった。そのようなきっかけを作る土俵として今回基本目標の一つとして循環型の経済を打ち出していく意義についてご意見をいただきたい。

【委員】

「人」というテーマは重要だと思うが、どうしても人が前に出ると環境はいいのかという議論が出る。表現をどうするかは別だが、これからはAIも含めて様々な形でシステムが主語になっていく中で、ヒューマンドリブン¹な形で人を中心としたアプローチができることは重要なテーマであることは間違いない。しかし、基本理念が「環境創造都市」から「人」になった時にインパクトが大きくなるのが懸念される。新しい産業創造もそうだが、若い人がチャレンジできる環境作りを進めるには、お金よりも人の部分大きい。ニセコ町の特徴として、環境という言葉を使うのではなく、人というテーマを含めるのなら「サステナブル (Sustainable=持続可能な)」か「サステナビリティ (Sustainability=持続可能性)」を入れたい。これからは「サステナブルバランス」、すなわちどうやってバランスを取っていくかが重要。日本語にすると「調和」「共生」になるが、絶妙なバランスをニセコで取れるならその意義は大きい。「バランス」はダイレクトな言葉でわかりやすいが、現在は言葉として柔らかく、日本の和を感じるということで「ハーモニー」を使うことが多い。調和・共生や人というテーマの中で良い言葉が出たらいいと思う。

【会長】

従来の人づくりは一方向的に教え・教わるという関係がイメージされる。ニセコ町には「相互扶助」のようにお互いに高め合うという概念が脈々と受け継がれていると思う。お互いに高め合うような言葉が出ればいい。

¹ ヒューマンドリブン (human-driven)：人間的感性や行動に基づいた意思決定

【委員】

教えるという時代ではない。相互に学び合う、リスキリング（学び直し）が必要と言われているが、学生だけでなく年配者も学び続ける時代であり、その変化に対応し続ける必要がある。その中で高め合う環境を作るのは大事。ニセコ高校の改革も始まっているので、学び合える場はいいメッセージだと思う。

【会長】

大学でも学生人口が減り、どうやってリスキリングするかという話が出ている。ハーモニーに通じるように感じた。

【委員】

土台の部分として、「自然資源と開発の調和を図る」のところで、審議会の皆さんに再考していただきたい部分がある。これまでの2回の審議会でも、大人WSでも、子どもWSでも、すべてで「自然資源と開発の調和を図る」という意見は出ていない。自然資源を守り、行き過ぎた開発を抑制するという意見が多い。オーバーツーリズムといった、調和というより抑制に方向転換しなければならないと思う。綺麗に「調和を図る」とまとめてしまうと、後々他の個別計画や観光ビジョン、景観条例の関係などに影響する。結局は総合計画を見ながら各計画も作られていくので、「開発を抑制する」といった方向に今回の総合計画からは舵を切ることが大事だと思う。

経済の部分として、ニセコ町の経済は農業、観光、サービス業で成り立っているとのことだが、開発と新幹線工事などの影響もあり、今地域経済を支えているのは建設業になる。生産の部分や付加価値の付与の部分、雇用者への所得の部分でも、建設業がニセコ町の給与所得水準を引き上げている。付加価値の創造は、建設業に次いで農業が2番目となる。農業は今回の総合計画の取りまとめの中で軽視されていると思う。ステレオタイプ的にはニセコ町は観光のまちとされ、就業人口をみると宿泊・飲食業で働いている方も多いが、そこで付加価値が創造され、町民に分配されるような循環型の流れができていくわけではなく、低賃金の雇用が多い。開発の利益も基本的には域外に流出している。

第2次総合計画では農村地域としての力を強めること、第3次総合計画では内部の人的なもの、しくみを強化するという方向性が示され、第4次・第5次では外に向けて発信するという方向性が強くなっている。第6次はもう一度内部の強みを見直し、これまでの反省として開発・観光・宿泊についてどのような捉え方をして付加価値をつけ、建設・農業についてどのような対策をしていくのかという視点に立って作るよう配慮すべきではないか。その他の理念・社会・人づくりの部分はこれまでの意見がまとめられていると思う。経済の部分と土台の自然資源・開発については、事務局案のとりまとめに対して違和感がある。

【会長】

「自然資源と開発の調和を図る」ではなく「自然資源を守る」。ニセコの財産としての自然環境が失われないうちに、きちんと守ろうということを示したい。

【委員】

ニセコ町において住民が個人で所有している住居の延べ床面積は約30万平米になる。既に開発されている宿泊・観光関連の延べ床面積に、これから開発が行われることが確定している面積を加えると、それを超えるレベルになる。ニセコ町では住民の居住に使われる面積よりも広く観光によって開発がされるわけだ。これは進行中の話で、違法でもなく、法律に則ってすでに許可が

通ってしまっている開発のことで、さらに将来これが増加してゆくことは確定している。したがって今後、長い視点で見た時に「調和を図る」では弱く、今回の総合計画の中で「抑制」しなければならないと思う。

【会長】

建設業について、北海道のほとんどのまちは、農業のまち、漁業のまちというが、2番目は建設業になる。建設業は北海道の中でも従事している人が多い。それをどう考えていくかが大事。

【委員】

始めから一貫して思っていることは、町の発展と環境の保全、教育改革が必要。今の話と近いが、森を守ろう、景観を守ろうとしても、富裕層や投資家から見れば少しルールが変わっても開発していこうという考え方になる。真に抑止する力がなければ止まることはない。そこで、開発することで住民や町が豊かになる住民ファーストの開発、この場で話し合っていることを現実にもしてもらい、我々が望む方向に開発してもらうことが重要。一緒にまちを作ってくれる民間企業に入ってきてもらい、共存する。投資家や富裕層にとっては、リターンがあればよく、このまちがどうなっても関係ない。開発は止められないので、開発をすることで我々がどう豊かになるのかを考えていく。公園を作り子どもが遊べるようにする、プールを住民に開放するなど、外から民間企業が来ることでまちが豊かになる、そうでなければ入らせないとと言えるくらいでも良いと思う。

教育に関しては、教育環境による人口流出の課題がある。小学校3年生くらいから中学校の進学先を考え、札幌や海外に引っ越すことが多い。その要因としては、教育に独自性がないことと、農業や観光の仕事に就く人を創る環境だったことにある。町内にはビジネスをしている人も多くいろいろな教育ができる可能性を秘めている。既存の教育法としてはシュタイナー教育²やモンテッソーリ教育³などもあるが、ニセコ町が独自の教育方針を打ち出してはどうか。近隣では日本一の公教育を掲げている安平町などがある。ニセコ町が良い教育をすることでたくさんの人が住んでくれる町になる。富裕層に限らず人口が流出しているので、教育が最優先だと思う。

【会長】

既存の綺羅乃湯でいかに稼ぐか、もしくは新しくするかは判断が分かれる。教育は大事だが、従来の受験勉強の教育ではないものが必要。ニセコなりに次のニセコを担う人材をどのように生み出すか、いろいろな意見をいただきたい。

【委員】

IQなど測れるものを重視した教育ではなく、EQ、CQなどを重視した教育が必要。教育は、資料4の「人づくり：未来を生き抜く力を育む」というジャンルに入ると思うが、生き抜く力はサバイバル的な要素を含む言葉で、言い換えると心と体を育てるなど、いろいろな意味がある。参考までに森の幼稚園の指針としては、「子育てを支え合い、喜びに満ち溢れた社会を実現していく」、

² シュタイナー教育とは、オーストリアの哲学者ルドルフ・シュタイナーが考えた教育法で、一人ひとりの個性を尊重し、個人の持つ能力を最大限に引き出すことを目的としている。発達段階に合わせた芸術教育に重点を置いた取り組みが行われるのが特徴。

³ モンテッソーリ教育とは、イタリアの女性医師マリア・モンテッソーリが考えた教育法で、「自立し、有能で、責任感と他人への思いやりがあり、生涯学び続ける姿勢を持った人間を育てる」ことを目的としている。子どもの「自己教育力」を育むため、発達段階に応じて「整えられた環境」を準備することで、子どもの自発的活動を促すのが特徴。

「いのちの根っこを輝かせていこう」、「非認知能力を伸ばしていこう」といった言葉で示されている。「人間力を高める」という言葉を使うとビジネス要素が高まるため、ワード的にはどうだろうと思って考えていた。教育はシュタイナー教育、モンテッソーリ教育やインターナショナルスクール等、いろいろな教育方法があっいい。それを受け入れる町であってほしい。現在、ニセコ町の公教育としてニセコ小や幼児センターに足りないのは、そういうものをオープンに受け入れる土台がないことだと思う。小さなまちなので、子どもがいろいろな友だちに出会う機会が少なく、仲間が固定されている。ニセコ町では、インクルーシブ教育⁴やインクルーシブ保育を見る機会・会う機会がないと感じている。子どもたちは、障がい者や福祉施設・老人ホームの入居者が散歩している姿を見るのが少ない。積極的にそのような場を作っていくと、子どもの視野が広がると思う。子ども達が多様性を認められるような環境づくりを町が積極的にしてくれればと思う。

【会長】

ニセコで育てられる子どもはどのような子どもか。ニセコでどのような子どもが育つと良いと思うか。

【委員】

ニセコ町の義務教育は、想像力をもって自発的に行うというよりも、社会システムの中で受動的に上手に生きていくために、きちんと働ける人をつくる教育という印象がある。自発的にアイデアを出して自ら考えてやっていけるような子育てをしたい場合は、他のまちに行ってしまう。

【会長】

社会で子どもを育てる。そこに相互扶助の考えがある。

【委員】

IT 関連もそうだが、新しいものを発想する時には自然の中でいかに遊んだかが重要になる。ニセコには豊かな自然があるが、「川は危ないから入らないで」などといった体験させないで育てる教育は良くない。自然の中で危ないことも体験することで生き抜く力を身につけられる。それをニセコで教えられる、一緒に学び合えるような教育機関ができれば楽しい。

【会長】

私がニセコならではと思うのは、世界や全国で活躍されている方が町内に多数いること。そのような方が子どもの教育に携わっていただければ、それは札幌など他のまちや大学では容易には実現できないことになる。それが宝であって、そのような人たちと触れ合えることが子どもにとっていい機会になる。そういう教育があっほしい。ニセコを新しく切り拓いていく方々が子供の教育にも携わるチャンスがあると良い。

【委員】

教育について、人の多様性はニセコならではだと思う。自然豊かな中でいかに遊ぶかも大事。フランスでは、一流シェフが小学校に来て味覚の教育をする。そのようなところから「美食の街」の基盤ができる。ニセコも自然の中で遊ぶと味覚・嗅覚・聴覚などが磨ける。

全体的な話として、町民から聞いたこととして共通していたのは、ニセコ町はキーワードばか

⁴ インクルーシブ教育とは、国籍や人種、言語、性差、経済状況、宗教、障害のあるなしに関わらず、すべての子どもがともに学び合う教育のこと。

りで中身がないということだった。ニセコ町民としては、カッコいい言葉は溢れているが、自分たちが言ったことをやってくれないと感じている部分がある。今回はどのような理念（キーワード）にしていくかという議論も大事だが、さらに「これだけはやる」という具体的に実施する柱についてもっと議論してもいい。ここで挙がっているキーワードは第4次や第5次の時と同じで、言葉を変えているだけだと思う。町民が言っていることは変わっていない。その中で前回のアンケート調査と役場の意識の乖離をみると、ビジョンは共通して持っていて、実際にやっている部分で町民が不満に思っていることに目を向けて、実施計画に落とし込まなければならない。そのような議論を一緒にできればいい。言葉については、第4次は文章的に示しているが、第5次はキャッチフレーズになっている。ここがわかりにくいと言う方もいる。例えば、「環境創造都市ニセコ」は一見カッコいいが、自然環境も含めて考えると、自然環境を創造するのは人間のおごりではないかと感じる。言葉の選び方は大事。カッコいい言葉を選びすぎると誤解を招きかねない。平易でわかりやすく、皆で考えていることを表したい。

【会長】

この議論の中でも、キーワードを議論しながら、具体的なことも聞きたい。

【委員】

ニセコ町の地理的な特徴で、集約しているところもあれば、点在しているところもある。当方は点在しているところに住んでいるが、人の動線と持続可能をどう結び付けるかを考えている。例えば、点在している農家が年をとって農業ができなくなった時に、点在から町に集約する流れが起きる。逆に、外部から来る若い人は都市部から点在するところに住みたい人が多い。逆の動きがある。この二つの人の動線をつなげられないかと考えている。それが他の地域と違うと思っている。キャッチフレーズについて、パッと見てエンディングがわかる単純明快なものがいい。その一つの言葉から各々が想像したり感じたりするものもいい。その軸が必要だとは思うが、時代的にも端的でわかりやすいものが良いと思った。

【委員】

皆さんが言われている通り。第4次と第5次はほとんど同じで、言葉を少しずつ変えてきているが、変える必要があるのかと思う。理念にしても、流行りのSDGsを入れたとしても何を持続可能にするのかわからない。「持続可能なまち」とはつぶれないまちという意味に思ってしまう。見たらわかる簡単な言葉がいい。ハーモニーはわかるが、サステナブルはピンと来ない。人々が学び合える場所というキーワードがあったが、農家にしても事業者にしても一人親方の人が多い。基本的には田舎なので、そういう人たちが協力してできるかというところが難しいと思う。

【会長】

持続可能はサステナブルを訳した言葉だが、わかりにくい。

【委員】

自分が子どもの頃は農業と観光のまちと思っていたが、いつの間にか観光がメインになり、開発だけが進み、どんどん変わってきていると実際に思っている。自然資源と開発の調和は無理だと思う。開発を止めるまで言ってもいいと思う。教育は分からないが、自然をどう守っていくか、それをどうにかしなければと思う。

【会長】

自然資源と開発の調和ではなく、自然を守っていく。開発を抑制するとまでは言わなくていい

が、ニセコの自然を守っていこうというニュアンスに変えた方がいいかもしれない。

【委員】

温暖化は絶対に止めないといけないと思っている。個人的には、開発を止めてでも自然を守った方がいい。町民WSでも多くの方が言われていて、そう思っている方は多いという印象がある。

【会長】

町民の方もそういう意見が多かったということで、抑制するという意味で自然を守っていくというニュアンスに変えた方がいいか。

【委員】

下手に調和という言い方をされるよりも、自然を守ると言い切った方がいい。

【会長】

ニセコだからこそできるのかもしれない。

【委員】

法的に言うと、行政で止められることは多くない。しかし現状に流されているいろいろなものが決まってゆくのではなく、町として、自然を守ることを第一に、土台の部分を作っていかなければならないという危機感を持っている。

【委員】

守るということで基本的に良い。守り方を具体的に考えていくことが重要。何をもって守るのかということか議論されないまま守ると言うと、抽象度が高い。私も2年前に移住をした。家が建っているし、開発行為になっている。これを否定するかも含めて「守る」ということがどういうものなのかを考える、守る産業構造転換が必要。建設業はダムを壊すことも含めて、環境を戻すために動いている会社もある。例えば、大阪府で当方が顧問をしている会社では、御堂筋で車が通れたところを緑化するなど、緑化メインの事業に切り替えて構造転換しようとしている。そのように考えた時に「守る」ということが経済的に減少につながるという見え方がないようにすることが大事。

【会長】

森を守るなら経済活動になる。新しく建てる、開発を抑制して、いかに経済活動を作るかが大事。方向転換をさせていただく。資料4は見直し、文言を検討していきたい。

【委員】

どちらかという「生き抜く」というのは好き。子どもたちに「生き抜く」力を育むことが将来につながると思って野外保育活動をしている。先々週、北海学園大学経済学部 of 学生20名が野外保育活動を見学に来て子どもたちと雨の中森で交流した。ゼミの先生は、森林で遊ぶこと、地域で教育し合うことは経済活動の一つであり、それを学ばせるために生徒を連れてきたと話していた。経済はすべてを包含している。地域づくり＝経済活動であって、森で子どもたちと遊ぶことが経済活動だと言われたことが嬉しかった。経済活動は自然環境を守ることと相反しているようだが、密接につながっている。経済活動、お金の流れは必要な部分なので、環境開発と守るということをどうつなげていくのが難しい問題だと思う。

【委員】

「生き抜く」とはへこたれないことだと思う。潰されず、自分で前に進めること。

【会長】

「生き抜く」ではなく、教え合う、新しいものを学べる。学校ではなく、ニセコの社会で育てる、教え合う、育て合うといった相互扶助の概念を付加してほしい。

【委員】

教えるというのはおこがましいと感じる部分もある。子供が自ら学んでいくというニュアンスもほしい。その中で相互扶助というお互いが持っている良いものを教え合う部分もあると良い。

もう一点、言葉として違和感を持っているのが、「ニセコの価値を循環させる」という言葉がわかりにくい。ここも他の言葉にしてほしい。

【会長】

「価値」が大事なのか、「循環」が大事なのか。

【委員】

以前から片山町長も地域内経済循環が必要と言っている。「穴の開いたバケツ理論」によると、ニセコ町はエネルギーも含めて外に漏れ出ているので、それをニセコ町内でうまく循環させることは大事だと思う。ニセコの価値は価値として、それを大事にしていくという2つの要素があると思う。

【会長】

分けた方が良いのか。ニセコの価値は自然環境に関係している。ニセコの価値は自然だけではない。

【事務局】

ここでいうニセコの「価値」とは、自然環境という価値もあるが、起業しやすいなど経済活動をするうえでも新しい価値を見出すような土壌があるという意味で使っている。

【会長】

ニセコの様々な価値が回ってくるようなイメージになるといい。

②2035年のニセコ町の目指す姿

【会長】

全体のテーマについて、一人ずつ意見をいただきたい。さきほど第4次からほとんど変わらないという話があった。同じようなものを使うという方法もあるかもしれないが、総合計画のタイトルは何かというのは大事。そのタイトルをどうするかのご意見をいただきたい。

【委員】

「小さな世界都市」というのはわかりやすく明確な総合計画だと思う。そういう方向性で「世界一住みやすいまち」「住みたくなるまち」と関連して、「小さな世界都市」をベースに発展させた言葉が明確でわかりやすい。

【会長】

「世界一住みやすいまち」というと、移住者が増えるのではないか。

【委員】

総合計画や準都市計画は、住民がある一定量増えることを織り込み済みで策定されている。何千平米の住宅が増えたところであまり大きな影響はないと思う。私が懸念しているのは、十万平米単位での巨大な開発が山で同時並行に行われていること。私自身も株式会社ニセコまちとして、前回までの総合計画の中で人口増加に合わせて収容できる住宅を作ることが決まり、それに従っ

て開発をしている。その規模と山の中で行われている開発とは規模・次元が全く異なる。

【会長】

成長管理という、単に抑制するだけではなく、うまく抑制すること（スマートコントロール）を基本にしながら成長を考えていこうという考え方がある。そういう考えも実際の具体的な計画に入れていきたい。

【委員】

ニセコで育った人が地方に行って戻ってきたくなくなるようなまちにする。

【会長】

ニセコに「ふるさと」という言葉は合うのか。私はピンとこないが地元の方はそう感じるのか。

【委員】

以前、ニセコには世界一住みやすいまちのポテンシャルがあると言わせてもらったが、「世界一住みやすいまちニセコ」がいい。小学生が聞いても年配の方が聞いてもわかるようなものがある。エンディングが想像できるテーマがいいということだが、エンディングは「世界一住みやすいまち」だとシンプルでわかりやすい。何をもちょう世界一住みやすいかという、イギリスの新聞に掲載された一番有名なものと①医療、②文化、③環境、④教育、⑤インフラとなっている。今まで出てきたニセコの課題を解決するうえでも明文化されている。

「世界一住みやすいまちニセコ」をテーマとした時に良いことが3つある。1つ目は、外に対してPR力があること。世界一住みやすいなら住んでみようという気持ちになるし、住みづらさを感じている人、都会に住んでいる人が興味を持ちやすいキャッチーな言葉だと思う。2つ目は、住民の意識が変わること。住民がそれぞれ見ていくポイントは医療、教育、環境と異なると思うが、自分たち自身が世界一住みやすいまちを目指すことでそれぞれ意識が変わることが大事。3つ目は、それによって問題解決につながっていくこと。言っているけどあまり変わっていないというのは以前からの課題。解決する力を町だけをお願いするのは難しく、一人一人の意識を変えることで町自体を変えていく力になれば良い。そういった意味で「世界一住みやすいまちニセコ」は次の12年を担う言葉として良いと思っている。

【委員】

住みやすいのをすべて実現するのは難しく、住みづらくても幸せを感じられる部分があるといい。除雪をやっていて大変でも相互扶助で助け合い、そこで人と人とのつながりができて、周りを助けられて幸せと感ずることができれば良いことになる。住みやすいというのは一断面に過ぎない。世界一幸せを感じられるまちであってほしい。多少住みにくさがあっても、若い人であればスキーなどで幸せを感じられるし、年齢を重ねてから移住してきた人は自然環境の中で幸せを感じられたら、多少あばたもえくぼの部分があっても良いのではないか。

【会長】

世界一住みやすいというのは、外からの目だと思う。住民の人は自分が世界一住みやすいまちで暮らしていることが大事なのかと感ずる。中から盛り上げていくような言葉にしたい。今日キーワードに出ている「プライド」は誇りという意味だが、自己の責任も伴う。そういう意味でシビックプライドやニセコプライドというのも考えていきたい。

【委員】

変わってほしくないところに「人のやさしさ・受け入れる心」とあった。自分の住んでるまち

が好きだと思う心は自尊心につながる。例えば、自分で住んでいる場所や環境、自分が好きだという人が増えていけば、そのまちは外の人から見ても魅力的に映ると思う。響き合うような、「人が育ち合う」というフレーズだと良いと思った。

【委員】

やわらかい言葉がいい。ニセコの若者は疲弊している、町に対して諦めている人が多い。明るいフレーズや「喜び溢れるまち」といった明るいイメージの言葉がいい。先日、サーカスを見に行き、デジタルが多い中リアルで自分たちの体を使ってやることに感動した。「理想は高く、謙虚に初心を忘れず」というのが団のフレーズだった。ニセコもそうであってほしい。団結力と謙虚な心が必要だと思った。

【会長】

当大学の学生も同じで、リアルなものを見せると喜ぶ。私は建築が専門だが、実際の現場に行くと学生が喜ぶ。デジタル教育ばかりだが、リアルも大事だと思う。

【委員】

「皆が幸せを感じられるまち」がよい。世界一はしんどいと思っていたので、インクルージョン（包摂・包含）の視点が入ったら良いと思う。

【委員】

今後12年で目指すわかりやすい言葉がいい。コンペティション（競争）ではなく、一番でないという意味がないということではない。世界一のパウダースノーと言われるように、環境ツーリズムでも世界のトップクラスに入っているまちなので、個人個人の感覚はあるが、いくつか候補を決めて、住民に決めてもらうのもいい。

【会長】

新井委員の「皆で」という言葉は、ニセコだからこそ、自分だけではなく「皆で」という考え方になると思う。

【委員】

これからの12年を考えると、小学校3年生くらいの子たちがわかりやすいものがある。こういう町にしようというのがわかりやすい、子どもたちがそこに向かって学んでいけるようなシンプルなビジョンであってほしい。

【委員】

今後のニセコ町の方向性としてセンセーショナルな転換点があるのであれば、これからのニセコの環境を守るということを大きくPRするのはいいと思う。これまで積極的にPRしてきたが外向きであった。今回の総合計画では、今後は中の人々が幸せになるように整備してしっかりとニセコを守るという、大きな区切りをつけられるのではないかと期待している。

【会長】

ニセコは外から見ると観光などで盛り上がっているが、ニセコ自らが自分たちの財産を守るために「自然を守る」というのも大事なことです。

【委員】

第3次以降、特に第4次、第5次は外向きな言葉が多かった。今回は、もう一度第2次の総合計画に立ち戻り、確実な豊かさを得られる農村だということを打ち出した方がいいかもしれない。ただ、守らなければならないことと、変えてほしいこと・変えた方がいいことを見比べると、変

えてほしい・変えた方がいいことは、町民の意見の取りまとめをみてもほとんどが「暮らしやすさ」に関わる。公共交通や公的なインフラ、様々なアクセスについて「暮らしやすさを高める」と言い切っている。守らなければならないことは、既に安心・安全なのでこれ以上高める必要はなく、そこを守らないといけないと考えている。あとは環境・自然・価値を守らなければならない。この2つが明確にわかるように意見が取りまとめられたらいい。

【会長】

ニセコ 환경을保全していく中で、そういう経済も組み立てられるという発想もできると思う。

【委員】

一次産業もそうだが、どう育んでいくのかは子育てと同じ考え方。自然に近いほどどうやって育むかが大事。間引いていくのか、育てていくのかは、森林でも子育てでも重要なこと。価値だと見出していく力があればできる。価値というのは曖昧な言葉だが、価値化できることが重要。自分たちがニセコの中で定義すれば良い。それを世界の人たちが価値だと感じたら成り立つ時代になってくる。

【会長】

自分の足元にある自分たちの資源・資産に目を向けて、それをいかに循環させながら、広い意味での経済化を図ることがこれからの地域のあり方になる。これが先進的な取組になるし、世界一住みやすいまちにつながるかもしれない。

【事務局】

住民アンケートでは主に4つの意見があり、①自然を守る、②公共交通の整備、③医療をしっかり受けられる体制、④子どもの教育であった。その中で誰が聞いてもわかりやすいキャッチフレーズを考えることが大事だと思う。

【会長】

いろいろなことに関係するので、また議論を積み重ねたい。今日いただいた意見を整理して、次回皆さんと意見交換したい。

③次回の審議会（日程・内容）

【事務局】

第4回審議会は12月上中旬に実施したい。次回はタイトル案（目指す姿）を決めていきたい。

5 閉会

以上